日本産業衛生学会東海地方会

地方会ニュース

発行所　地方会ニュース編集事務局
〒 470－11
愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪１－98
藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学教室内　電話 (0562) 93－2453
FAX (0562) 93－3079
発行責任者　竹内康浩・島　正吾

(題字　皿井　進筆)

日本最古（20億年前）の石がみつかった飛水峡〔岐阜県加茂郡七宗町の飛騨川〕

企業変革と産業医の対応

花　井　喜一郎　（イビデン診療所）

近時、産業現場に働く勤労者が対面している状況には、多くの労働環境、態様（生活）変化があり、又それは、めざましいスピードで進展がみられるところです。我々が、この産業現場で実践活動する時、余りにも変りゆく技術の進歩、情報の氾濫に対し、多くの研究、研修会等に忙殺され、全く、どこに何うやら、暗夜のオボロ月の光ならまだしも、霧の中の不透明さを感ずる。こんな気持ちで暗然としている時、原稿依頼を受けましたが、この光栄あるニュース紙上に語る心境ではありません。本年もはなはだ暑く、やりきれぬ熱気が続いています。汗かきの私には一段とつらい時､まとまりそうもなく､銷夏随考の一私言とさせて頂きます。

資源の無い我が国が、之からの世界でいきてゆくには、技術向上は、欠く事の出来ぬ道で、常に生産があり生産現場がある、そして昔と違った環境、生活がある。元来企業とは、その時々の状況に、流れゆく時代の変化に対する適応業とも云われている。一応経済大国と云われるものの、人の価値観の今日への変化と、その多様化、更に人生へのみつめ方等と、又周囲に起こった超高令化、少子社会の中では、我々の仕事も今一度見直すべき時ではなかろうかと思われる。即ち産業医の仕事の巾広い学際的分野への気くばりと、情報のネットワークが希まれると云う事です。そして最も大切な事は、再度目標設定が必要であろう。目標とは、一応職業病、作業関連疾患、成人病の予防で、健康保持増進への積極的行動であろうか。一方、医療現場も、医療、保健、福祉、の３本柱の総合性を目標として変わりつつある。我々労働保健の３管理も、「トライアングル」から教育、訓練、環境、公害への対応、更に組織変革対応、メンタルヘルスケアー等々を加え５角型、６角型にも変り総合的管理に拡がっている。勿論、学際的に多くの分野へと視野を拡げた今、産業医として、仕事の再設定とは大げさだろうか。第１に我々現場の企業の本当の変革をよく認識することが大切で、特に組織変動による我々への企業ニードと就業構造変化は大きく変る筈で、之から目を離さず、その対応に努力すべきであろう。第2には技術進展が、我々医療界を大きく進歩、情報拡大を来しており、この選択肢を常に求めてゆく事、即ち企業外医療機関と、更なる連携が必要で、之等チームプレーが巾広く進められる体制づくりの必要な時代ではなかろうかと思考していますが、さて少なくともこの２つの目標を、追いかけるビジョンを持って生きる喜びと、幸せを感じて進んで行きたく思います。

特集１　平成８年度　東海地方会研修会

はじめに

橋　本　哲　明（関西電力）

今年は三重県で主催することとなり、三重産業医会（石川昭会長）が企画、運営し、６月28日四日市農協会館で開催された。当日は生憎の入梅空の天候であったが、遠くは宮崎、千葉県からも参加され、約130名の参加者で会場も満席で予備席も用意する盛況であった。

竹内地方会長の挨拶、尾上三重県労働基準局長、林三重県医師会長のご祝辞を賜った。今回も三重方式でワークショップで２題を２会場にわけて全員参加で討論された。夜は恒例の懇親会も約50人参会され、武藤四日市医師会長の祝辞もあり、盛会の裡に終わった。今回の研修会にご参加された地方会員諸兄姉のご協力に感謝申します。

日時：平成８年６月28日（金）
場所：四日市農協会館７・８階会議室

プログラム

10:20 ～11:50　特別講演
「サラリーマンの定年退職者の生活設計」
豊田俊夫（明治生命フィナンシュアランス研究所）
12:00 ～12:30　東海地方会総会
13:30 ～16:20　ワークショップ（２会場にて同時開催）
①「定期健康診断での追加項目について」
伊東敬之（近畿健康管理センター三重事業部診療所）
②「従業員に対する法定安全衛生教育に対する取組み」
吉川勝敏（松下電工四日市）
谷垣巳子男（日本鋼管津製作所）
16:30 ～18:00　懇親会

「サラリーマンの定年退職者の生活設計」を聴いて

石　川　　昭（三菱化学）

フィナンシュアランス研究所とは、Finance（財務）、Insurance（保険）とを組合せた言葉であり、国民一人一人の生活革新に対するさまざまな解決策を提供できる頭脳集団を目指している研究所である。

サラリーマンの定年退職を前にした人達の持っている不安は、次の３つである。これを３Ｋといっている。即ち、①は健康問題、②は経済の問題（老後の生活設計）③は心の問題(老後の生き甲斐)である。③の心の問題は、②の経済の問題と深いかかわりがある。本日は、②の老後の生活設計を中心にお話をする。

サラリーマンの定年は、現在の所、各企業とも60歳定年が定着してきた。ここで、厚生年金の満額支給開始年齢の65歳引上げが行われると、その間、再就職をと考えることになろうが、有効求人倍率は0.88であるので、再就職は非常に難しいといわざるを得ない。年金の満額支給開始年齢の段階的引き上げとか、在職老齢年金制度とかが考えらねばならない。

年金については、従来、資産運用の利回りを毎年5.5％と仮定して年金給付額や、保険料を決めてきたものが、バブルの崩壊で1980年代には、利回りが３％程度に落ち込んだまま、今も低迷している。又、出生率は1.8を見込んでいたものが、1.57と低下しているので、将来の労働人口が減少するため、財源として心細い限りである。

一方、公的年金全体を眺めてみると、日本の公的年金は、サラリーマンの厚生年金、公務員の共済年金、自営業者の国民年金にわかれている。国民年金の対象者は全国で2,000万人、未加入者は193万人、特に20歳代の若者層の未加入率が45.7％ととびぬけて高い。

これら各種公的年金を一本化しようとする働きもあるが、国会の選挙等により先送りされ、何時成立するやも見当がつかない。

さて、このように老齢者の生活をとりまく条件は、従来のような年金のみにたよることは出来なくなっている。従って表題のような生活設計、ライフプランセミナー等が、各企業においても積極的に行われつつある。

各個人によって、財力、仕事の能力等、すべて異なっているのでそれらに応じた対応が必要であり、一律にこうしろとはいえない。

働くか否かは、その人の価値観で－－－－だが備えは必要であり在職中からの自助努力が必要である。そこで、その道しるべである「生涯生活設計」が最近多くの人々の関心を集めているのも時代の流れである。生涯設計を38～40歳から始める人が多いが、サラリーマンの一生は、節目節目（ライフステージ）が比較的はっきりしているのが特徴で、20歳台から経済的設計に取掛っても、早いとはいえない。そのような習慣をつけることが必要である。

生活設計とは、一言でいってみれば、「幸せな人生を送るためのプランニング」のことである。では「幸せな人生」とはなんだろう。人には、それぞれ理想や夢があり、好みのライフスタイルがある。たとえ実現出来ないにしても、自分の理想とする生活に一歩一歩近づくことが「幸せに生きる」ことではないだろうか。

（豊田　俊夫 先生）

定期健康診断での追加項目について

野　村　新　爾　（日本硝子繊維）

平成8年6月28日、東海地方会研修会が開催され、表題のワークショップが行なわれた。司会者から「法定10項目健診や追加項目健診の現状、健保等他の制度との調整、安全衛生法一部改正審議過程における検診項目への提言」等の背景を踏まえて討議したいと主旨説明があった。

次いで近畿健康管理センター三重事業部診療所長伊東敬之氏から健診の現状について①定期健診の所謂成人病健診化、健保組合等の人間ドック・癌検診の実態②法定10項目健診でのメリット、デメリット③健保等他制度のと関係等多岐に亘り分析、更に④企業健診における癌検診の考え方⑤今後一般化が予想される検診項目等について、話題提供のための講演が行われた。

引き続き3グループに別れて討論に入り、⑴発見困難な疾病の検診項目（まとめ：伊東敬之氏）の討議では；肝炎について法定3項目の外ＡＬＰの追加並びに肝炎抗原抗体検査を二次検査とする。腰痛対策での骨量測定は今後知見の充実検討を。癌検診は高齢化社会の健診として価値があるが費用効果、年齢別リスクを考慮しての実施が望ましいとの意見があり。また動機づけ検診としてペプシノーゲン法、腹部超音波検査の提言もあった。

⑵健保等他の制度との関連（まとめ：関西電力の橋本哲明氏）では；現行法定健診でその目的が達せられており、多項目検診では事後措置等複雑・不十分になる。特に成人病項目の追加にはインフォームド・コンセントに注意。企業外健診では経過観察例・判読困難な項目が多く、人間ドック・胃癌検診ではケースにより保健指導が難しいなど現状肯定の意見があり。また小規模事業場の助成措置は事務的に煩雑で利用が少いとの指摘があった。

⑶定期健診の位置づけ－特にスクリーニングと予防措置－（まとめ：野村新爾氏）では；健診は疾病構造の反映であり正確な罹患統計が必要。情報量の少ない消化性潰瘍・ストレス関連疾患・腰痛症には問診の強化、また尿潜血・血糖・尿酸値検査の追加が必要。画一的な検診でなく対象により検診項目・隔年受診等弾力的な運用の選択。更に有所見者の二次予防と共に、無所見者（一次予防）に対し視点の拡大が強調された。

むすび；定期健康診断は、措置を要する者のスクリーニングであり、予防措置を講ずる為の健康状態の評価である。現行法定健診でその目的が達せられるとの意見もある一方、現状を反映したストレス関連疾患・腰痛症・消化性潰瘍・肝炎・糖尿病への対応が必要であり、癌検診・超音波検査も視野に置きたいとの意見もあった。また連続的な健康状態に対しその指標の複雑多様な現在、適切な医療区分、就労区分・保健指導等により一次予防（発生予防）への積極的なアプローチが改めて強調された。

従業員に対する法定安全衛生教育への取組み

滝　川　　寛

産衛東海地方会研修会の第2会場では、40名弱の会員の参加を得て第2主題について討議された。

労働安全衛生法第59条、第60条では安全衛生教育の実施を規定している。しかし、その教育の方法論に関しては規定がなく、各社が独自に工夫しつつ実施しているのが現状である。そこで、あるべき安全衛生教育を考えるため第2主題が採用された。

話題提供者は、安全衛生教育を所管する松下電工四日市工場の吉川勝敏氏と日本鋼管津製作所の谷垣巳子男氏であり、それぞれ自社における教育への取組みとそれへの工夫が述べられた。すなわち、吉川氏は従来からの講義方式を廃し、職場小集団を単位とした生産活動の中に安全衛生活動を定着実践させるため、安全キャッチボール運動の実施状況を紹介された。推進にあたり上司と部下との間の良好な人間関係の育成こそが、その鍵であることを力説された。また、管理監督者の率先垂範と反復教育、教育効果のフォローアップの必要性を述べ、教育に卒業はないと結んだ。

谷垣氏は安全衛生教育は知識を与えることではなく、実践の場で生かされてこそ意義があり、行動変容が見られて初めて教育の目的が達せられると述べられた。さらに吉川氏と同様、知育に偏りがちな現状教育の問題点を指摘され、自職場の問題として捕え易い視覚教育媒体の活用を提唱した。また、グループ討議の有用性についても論及され、安全衛生教育のライン化のためのキーマンの育成の必要性について触れられた。

両氏の話題提供のあと、第2会場内で3グループに分かれ、安全衛生教育の現状と今後の進め方について討議が行われた。

各グループ共に安全衛生教育の難しさと教育への取組みの弱さが自覚され、今後、行動科学的手法の導入の必要性が確認された。

（伊東　敬之 先生）

（吉川　勝敏 先生）

（谷垣　巳子男 先生）

話　　題

第10回日韓産業保健学術集談会

伊奈波良一　（岐大医衛生）

第10回日韓産業保健学術集談会は1996年5月30日（木）から6月1日（土）に札幌市札幌サンプラザにおいて開催された。

5月30日には前夜祭的に大韓産業保健協会・前衛連交流会と青年部交流会が行われた。筆者は後者に参加したが、日韓両国の若手の研究者から事例報告があり、活発な討論がなされた。その後の夕食会で研究者の自己紹介が行われ、日韓の若手研究者にとって楽しく有意義な交流の場となった。

6月1日には開会式の後、J. Rantanenフィンランド労働衛生研究所長による「研究から活動へ－万人のための産業保健活動－」と題する招待講演があった。その講演要旨は、近代的な産業保健活動は、生物医学・臨床科学を含むさまざまな学問分野の知識・方法に基づいている。とりわけ産業医学・自然科学・技術研究・行動科学・社会科学などである。そうした複合的な学問を基にして産業保健活動の有効な実践に役立てることが求められている。これには何よりも根本となる価値や目標に関する調査、方針に関するもの、施設に関するもの、産業保健実践方法論、財源・財政・評価に関する調査なども含まれる。ヨーロッパの国々、特にフィンランドでは、過去20年間に全国的な広がりをもって、関連研究分野の知識を基にして、サラリーマン、自営業者、農業労働者、個人企業経営者などあらゆる業種の人々のための包括的な産業保健活動に役立てて来ている。その発展過程で、活動範囲・内容、活動方針なども発達し、伝統的な危険防止的な方法から複合的な学問に基づいたサービス体系に転換してきている。そのような複合的な学問研究が、如何に労働者の健康に影響するかを、北ヨーロッパ、特にフィンランドの事例をあげて論じられた。また、6月2日にかけて、3題の特別講演、すなわち朴恒培漢陽医科大学教授による「航空宇宙医学」、斉藤和雄北海道大学医学部教授による「産業職場におけるストレス問題の解明」、王生北京医科大学公共衛生学院教授による「中国における産業医学の研究と産業保健医の教育」、を拝聴した。この他、「物理的要因による職業病」（計13演題）、「シンポジウム：振動」（計4演題）、「産業保健と情報処理」（計4演題）、「その他の労働衛生の課題」（計6演題）、の4つのセッションが設定され、活発な討論が行われた。次回は、2年後に韓国で開催される予定である。

フロン代替品として導入された 2-ブロモプロパンの生殖、骨髄毒性

市　原　　学（名大医衛生）

オゾン層破壊作用、地球温暖化作用をもつ特定フロンの生産の削減、中止が現在世界的な規模で進行している。一方、これに伴って各産業現場ではフロン代替品の導入が進んでいる。1995年7月、韓国の電子部品製造工場で、2-ブロモプロパンを主成分とする浸漬液に暴露された労働者の無月経、精子数減少、血小板減少が発見された。この浸漬液はフロン代替品として導入されたものであった。

名古屋大学では、韓国産業安全公団産業保健研究院との共同研究として2-ブロモプロパン9週間雄性ラット暴露実験を行った。その結果被暴露ラットの精巣上体精子数および運動精子率の著しい減少、尾部欠損精子および形態異常精子の増加、精巣重量および付属生殖器重量の減少、さらに汎血球減少症が観察された。病理組織学的には、精上皮胚細胞の喪失、骨髄の巨核球減少が観察された。一方、肝臓、腎臓等の臓器に異常は認められなかった。この結果から2-ブロモプロパンが精巣と骨髄に対して選択的な毒性をもつことが明らかとなった。

2-ブロモプロパンは、薬剤製造における中間物質としては従来より用いられていた。しかしその毒性は、半数致死量を決めた急性試験を除くと全く未知であった。日本産業衛生学会あるいはACGIHにおいて許容濃度は決められていない。この物質の毒性がよく知られていなかった理由としては、労働者が暴露される機会が少なかったことが推測される。なぜならば中間物質としての化学反応は閉鎖系で行なうのが普通であるからである。

ブロム化炭化水素のうち、DBCP（1，2ジブロモ3-クロロプロパン）の生殖毒性がこれまで明らかとなっている。またジブロモプロパンの毒性についての若干の研究はあった。しかし、モノブロモプロパンの一種である2－ブロモプロパンの生殖毒性については明らかにされていなかった。今回の中毒事例は、ブロム化炭化水素による中毒の系統的研究の必要性を示したと言える。

CFCの代替物であるHCFC（ハイドロクロロフルオロカーボン）は使用期限が先進国では2020年にせまっており、またHFC（ハイドロフルオロカーボン）はその強い地球温暖化作用のために今後規制されることが予想される。早晩、代替物であるHCFC、HFC 廃止後の新たな洗浄方法の導入が必要となるであろう。代替洗浄法の選択は基本的には各企業に委せられており、企業ごとに様々であることが予想される。その際急速に導入されることになる多種多様な化学物質の毒性について十分な注意を払わなければならない。

第42回労働衛生史研究会

日　時：平成8年11月15日(金)　13:30～17:00
場　所：名古屋大学医学部鶴友会館
プログラム
(1)　特別企画：東海地方会発足60周年を記念して
1．東海地方における労働衛生の展開
井上　俊先生（名大名誉教授）
2．60年を振り返って―エピソードを中心に―
奥谷博俊先生（名市大名誉教授）
3．自動車工業における労働衛生の展開
柏木正雄先生（前トヨタ産業医）
4．東海地方における産業医協議会の展開
加藤竹男先生（前日本陶器産業医）
(2)　一般演題（募集中）　演題申込締切：1996年10月31日
1．アメリカのじん肺の歴史
吉野貞尚（前旭労災病院副院長）

連絡先：〒466　名古屋市昭和区鶴舞町65
名古屋大学医学部衛生学教室
TEL　052-744-2124，FAX　052-744-2126
第42回研究会世話人：竹内康浩

特別寄稿

人生いろいろ

片　岡　咲　子　（本田技研浜松）

企業の健康管理センターに勤務して６年。以前の様に栄養指導の相手も病院へ通院してくる患者ではなく、一見健常者として通勤してくる従業員だという意識にも慣れた今日この頃である。

戦後50年、社会構造の激変は、疾病も感染症、栄養欠乏症から生活、食習慣が大きく関与する成人病へ。企業も診療所から健康管理センターへと、早期発見、治療型から早期予防型へと名称、業務内容共に変容してきた。人生80年の食事回数87600回。たかが食事、されど食事である。一億総グルメと言われて久しいが、片や一億総ダイエット流行（バヤリ）。当健康管理センターのスタッフを極秘調査しても、いるわいるわの「おダイエット」達。その方法と結果を少し紹介すると、「りんごダイエット」１～２kgの減、但し３日目に足から力が抜けダウン。体力、気力共に落ちる。リバウンドも大きい。「きなこ牛乳」朝夕食前に飲む。結果、何がどういう事はなかった。「オオバコ」２週飲む。便通がよくなり、体重変化なく、胃が荒れた。「ギムネマ茶」価格が高く、続かない。「スヴェルト」３週使用。ふくらはぎが３cm太くなった。「補正下着」11号→９号。着用しなければ元の黙阿弥、おまけにローンが残った。「カロリーダウン」と称し、朝は牛乳か欠食、昼半分、夕は野菜を丼一杯２週でだるくなり、適度に肉も食べる様にした。「間食禁止」イライラして継続不能等々。情報氾濫時代、バブル経済は崩壊すれど、巷では、バブルの如く、「健康情報」が溢れて消える。あたかもそれを食べていれば治る、痩せるという様な錯覚にとらわれ易い人達も見受けられる。「健康志向」は強いのだが、各種の体験談に惑わされ易い。又、社会・生活様式の変化の加速性はすさまじく、「食」も同様。家族団らんから個食、孤食。主食から趣食へと変わってきている。この様な社会背景を念頭に置き、個々の年齢によるQOLのプライオリティに沿う栄養指導を展開しなければ相手には受け入れられない。『長命』より『長寿』を求める昨今、「食」が健康の基本要因の重要な一つであり、かつ予防にも大きく貢献する。産業栄養指導者は、病院の『臨床栄養士』に対し、『隣人栄養士』として長期の栄養指導をタイムリーに行う事を求められている。T…楽しく、H…ヘルシーに、P…プランニング、をモットーに行った糖尿病教室のテーマソング「人生いろいろ」。皆さんもご一緒に。

糖尿病だといって　　悩むのはいやだわ
食事バランスとって　　腹は八分目
砂糖、油を控え　　野菜、海藻たっぷり
酒やジュースをやめて　　過ごしてみたわ
ねぇ、血糖いいでしょ！この頃、ねぇ、スリムになったでしょう
コレステロールも少なくなって、肝臓の脂肪もとれてしまったの
人生いろいろ、糖尿もいろいろ、どうせなら元気で過ごしたいのよ

キルナ鉄鉱山訪問記

柴　田　英　治　（名大医衛生）

今年の新年号の地方会ニュースでもご報告しましたが、私は昨年10月からスウエーデンのストックホルム郊外のソルナにある国立労働生活研究所で客員研究員として仕事をしています。滞在期間を当初の１年から半年延長し、来年の春までこちらにいる予定です。

私が所属しているのはToxicologyの部門で、グループの実質的なチーフであるDr. Gunnar Johansonを中心に主として有機溶剤の体内動態を研究しています。私はこの研究所に設置された人体曝露チャンバーを利用して有機溶剤の混合曝露における代謝物の動態に関する実験に取り組んでいます。労働衛生の分野でもかなり基礎的な研究になるため、労働現場の観察や産業保健の実践活動については少し遠ざかっています。

そんな中で、今年の２月に有名な鉄鉱石の産地キルナを見学できたのは収穫でした。この鉄鉱山での採掘を担当するＬＫＡＢ社の現在の年間生産量は1900万トン、従業員数は3000人を擁し、今世紀の始めに本格的な操業を開始して以来、スウエーデンでも屈指の産業として発展してきています。キルナの町もこの鉱山とともに発展してきたといっていいでしょう。現場はoreとよばれる原石採掘のための掘進作業、地上のペレットへの加工工場までの運搬はほぼ完全に自動化されているため、地下で働く作業者の多くは運搬用鉄道、掘削機などの制御にあたっています。迷路のように続く坑道を下って地下に設置されたOA機器があふれるオフィスや制御ルーム、さらに無人化された運搬用鉄道などを見せてもらいました。現場に仮設された制御ルームの一部のモニターテレビの配置に人間工学上の問題点を感じたものの、全体として環境は整備されており、産業保健先進国のスウエーデンの職場であることを実感させられるものでした。せっかくの機会だったので、このLKAB社の産業医 Dr. T Aspehult にご無理をお願いし、30分ほど時間をとっていただき、お話をうかがうことができました。紙面の都合で多くをご紹介できませんが、印象に残ったのは現場から問題の指摘があれば２週間で解決策を具体化すると言い切る起動力と年単位のプロジェクトを組んで重点課題に取り組む計画性です。一般健康診断がかなりの比重を占める日本の労働衛生活動のことを話すと怪訝な顔をして「それは何のためにやるのか」と聞かれ、少し説明に困りました。彼は最後にホワイトボードに人体を描き、下肢、腰部、上半身、頭部に分けそれぞれ70's、80's、90's、2000と記入、「下肢に多い外傷の問題は70年代に概ね克服した。80年代は腰痛問題に取り組んだ。90年代の問題は肩、頚の痛みだ。21世紀は脳と心の健康に取り組まなければならないだろう。」と熱っぽく語ってくれました。なお、じん肺については新たな発生はなく、ごく少数の高齢の有所見労働者の管理をしているとのことでした。

ところで、キルナから車で30分ほどのところにはユッカスヤルビという村がありますが、この村で数年前にオープンした全部氷でできたホテルのことは北欧の観光案内書を見られた方ならご存じの方もおられるかもしれません。キルナ鉄鉱山見学の際に話の種にとこの氷のホテルで一泊してきました。その話はまた別の機会に譲ることにしましょう。

シリーズ１　若手産業医に聞く⑨

前職場での忘れ物～桑名の鋳物業における労働衛生的問題と産業医

松　田　　元　（松下電工四日市）

昨年の５月に松下健康保険組合に就職、松下電工四日市工場健康管理室に勤務させていただいている。それ以前は三重県産業衛生協会に所属し、桑名市に７年程在住した。桑名は大規模な団地開発が進む一方で古い町並みが残る、住みやすいところであった。桑名駅のロータリーに「鋳物の町」というモニュメントがある。実際、桑名市～員弁郡には多くの鋳物産業が存在している。製品としては電車部品、マンホール、コンロ等々、一般にもなじみのあるものが多々ある。事業所の規模については、100～200名前後の工場がいくつかあるが、多くは数名～10数名程度の零細事業所である。このような零細事業所では種々の粉じんが結構な曝露濃度で存在し、それに対する衛生意識はあまり高くない。労働強度はそれほど強くなさそうだが、炉がある関係上、暑熱という負荷因子がある。強い影響が見られるほどのものではないが、炉で溶けた鉄から赤外線も発生する。労働年令は高く、60代や70代でも現役で働いている方をよくみかける。鋳物業に限ったことでもないが、南米やアジア系の方が多数いる。

これらの零細事業所においては、労働安全衛生分野の用語でいう４Ｓの意識の薄い職場が少なからずみられ、下着の中まで真っ黒な作業者の方も珍しくはない。粉じん粒子の大きさの点で、身体や衣服に付着している黒々とした粉じんは、必ずしもじん肺を起こしやすいものではなかろうが、このような事業所では胸部Ｘ線で２型以上の所見を有する方をしばしばみる。一事業所でも砂も使えば黒炭も使い、また炉からヒュームが立ちのぼるなど複数の粉じんに曝露されていること、曝露低減対策が弱いことなどが理由として考えられる。また、いくつもの粉じん職場を渡り歩いた後に、じん肺所見を持ったまま現在の事業所に就いている方もいるであろう。

このように桑名市の鋳物業には労働衛生的問題が多くみられた。その問題に尽力できなかったことが、私の師匠筋から責められるところである。

ところで産業医の選任基準について50人のラインを30人にというようなことが取り沙汰されているとも聞くが、人数の問題だけでよいのだろうか。小企業～零細企業の場合、嘱託産業医が労働衛生的問題に対して発言した場合、それが事業主の意にそぐわなければ次回の契約がなされないことはあり得ると思う。小企業については、ある機関を媒介として産業医契約するような形のほうが発言しやすいのではあるまいか。但し、その機関とは健診業者などではないこと。健診業者の場合、健診契約受託が足かせになる。

成人病対策だけでよい小規模事業所も多いであろうが、例えば桑名の鋳物業等、労働衛生対策の必要な事業所では、産業医選任の有無だけでなく、産業医契約のあり方も問題であると考える。

シリーズ１　若手産業医に聞く⑩

産業医はなんでも屋である

福　井　　明　（豊田工機）

四年前に専属産業医になった時、地方会ニュースの「若手産業医に聞く」のコーナーを見て、「まずい／いつかは書かされるのでは」と思ったのですが、「私のような無名の若手で、しかも小さな会社の産業医には当分回ってこないだろう」と考え直して落ち着きを取り戻したのです。しかしこんなに早く順番が回って来るとはこの業界はよほど人材不足なのでしょうか？

難かしげな事を書き並べる能力を持ち合わせていないので、産業医の仕事についての独断と偏見に基づく感想などを述べて責をはたし、いやお茶を濁したいと思います。

産業医は孤独であるということ

これはよく言われることですが、自分がその立場に立ってみると確かに実感します。病院にいるときは同じ立場の医師がたくさんいて、心強いのですが、産業医となると職場に一人しか医師という立場の人はいないことが多いでしょう。病院では医師など別に珍しくもないが、産業医となると会社に一人しかいないので珍しく、そういう意味では大切にしてくれますが、製造業の現場では生産性のない部分は中心ではありません。しょせんはお客様、下手をすると厄介者にもなりかねません。しかも、産業医の仕事は、決められたマニュアルがなく、医師の裁量に任される部分がかなり多く、重要な決断を強いられることがあります。ますます孤独を感じます。

産業医はなんでも屋である

産業医の主な仕事は、健康管理や工場巡視、作業管理、作業環境改善といった事が中心で、診療は二の次だと考えているのですが、実際には産業医が社内にいれば従業員は診察時間外でも当然のような顔をして診察を受けに来ます。診察自体の内容は病院にいるときに較べて簡単なことが多いのですが、相談事の内容は種々雑多でいろいろな分野の広い知識が求められます。「私の専門は…」などと言っておれないのです。産業医になってからは興味の対象が浅く広くなってきました。ちなみに、私の専門は消化器内科で、大腸ファイバースコープを得意としていました。

これから

健康管理は、企業の中ではどちらかというと日の当たらない部門ですが、ここの存在を重みのあるものにするのも産業医の大切な仕事のひとつだと思っています。とりあえず最近使い始めた社内ＬＡＮシステムの電子掲示板を利用して健康管理、医学情報の普及に努力をしています。

シリーズ2　留学生に聞く⑤

雑学者略伝

孫　　健（名大医衛生）

私の学生生活は何度か途切れている。小学校5年の時、文化大革命が始まった。あれから既成の文化、知識を学ぶことが一切禁止された。学校へ行っても、毛沢東の文章しか教えてくれなかった。なにも分からずに、学校を卒業し、機械工場で働くことになった。そこで働きながら、機械・電気などの技能を身に付けた。24才の時、廃止されていた大学入学試験制度がついに回復された。私は重労働をしながら、一生懸命受験勉強をした。結局、40倍の競争率で無事合格し、希望通りに電子工学を専門にすることができた。卒業後電子工場の技術者、技術学校の教師、生涯教育の管理者などを経て来日した。

来日当初、本当に大変だった。言葉が分からなかったため、あちこちアルバイトを探しても採用してくれなかった。持ってきたお金はほんのわずかであり、毎日食パンだけを食べたとしても一ヵ月しか続けられない程度であった。さらに、暫く住んでいたところから追い出された。止むを得ず、大阪あいりん地区の簡易旅館に泊まって日雇労働をしながら、日本語の勉強をした。そのとき、いくら苦しくても、博士号を取得しなければ国へは帰らないと決心した。

ようやく神戸大学大学院を無事に合格し、浮浪者から大学院生に変身した。しかし、大学院生の生活も決して楽ではない。生活のためにまずアルバイトをしなければならない。勉強が忙しいために、アルバイトをする時間を取ることがなかなかできなかった。結局週末だけのアルバイトでぎりぎりの生活を維持し、研究を続けてきた。

神戸大学で情報工学の修士課程修了後、名古屋大学大学院医学研究科の博士課程に進学した。現在、職業病の疫学的研究を行っている。順調に行けば、来年大学院を修了する。情報工学の知識を活かし、医学を研究すればするほど、未解決の問題が沢山見つけられる。これからも続けて疫学を研究したいと考えているが、そろそろ学生時代に終止符を打ち、社会人に戻らなければならない。生活のため、これからまた別の分野に入るかもしれない。

名古屋大学在学の四年間は、いままで私の過ごした人生で一番楽しい時期であった。衛生学教室の皆様に生活や勉強などの面で色々と面倒を見て頂いた。この場を借りて、感謝の意を表したい。

学会研究会

第69回日本産業衛生学会

水　野　やよい（藤田保衛大医公衛）

第69回日本産業衛生学会は、6月2日より5日まで旭川医科大学の山村晃太郎教授を学会長として、旭川市民文化会館、サン・アザレア、旭川勤労者福祉会館の3カ所にて開催された。学会3日目の6月4日には総会が行われ、会場は学会員で埋めつくされた中、中災防大阪センターの河合俊夫先生による「化学物質の暴露評価のための分析技術の開発と評価方法」、熊本大学医学部の永野恵先生による「有機溶剤の神経毒性の発生機序に関する神経生化学的研究」の2題の奨励賞受賞講演が行われ、大変興味深いものであった。特別講演では、大崎饒先生、布施晶子先生の2人の先生方より、北海道における職業性呼吸器疾患の現状と問題点、女性労働の諸問題など、産業衛生管理において誰もが直面するであろう課題についてご講演を頂いた。今回の学会も、旭川の初夏の香り漂う中、盛会のうちに閉会となった。

これからの諸行事予定

第36回日本労働衛生工学会
日　時：平成8年10月30日(水) 9:00～10月31日(木)12：00
場　所：名古屋国際会議場（名古屋市熱田区）
実行委員長　小森義隆（大同産業医学研究所）
シンポジウム：10月30日　午後～
テーマ「作業環境における空気浄化技術」
研究発表：10月30日、10月31日ともに午前中

第17回作業環境測定研究発表会
日　時：平成8年10月31日(木)13:30～11月1日(金)16:40まで
場　所：名古屋国際会議場（名古屋市熱田区）
実行委員長　日本作業環境測定協会東海支部長
小森義隆

平成8年度日本産業衛生学会東海地方会学会
学会長　山内　徹（三重大学医学部公衆衛生学教授）
日　時：平成8年11月29日（金）9:30～16:30
場　所：じばさん三重（三重県四日市市安島一丁目3番18号）

特別報告「労働時間、交替制勤務に関する労働衛生学的課題」
講師　小野雄一郎　（名古屋大学医学部衛生学助教授）
座長　岩田　弘敏　（岐阜大学医学部衛生学教授）

シンポジウム「ワークスタイル・ライフスタイルと健康総合評価をめぐって」
司会　入谷辰男　（トヨタ自動車産業医）
産業保健の立場から…竹内康浩（名古屋大学医学部衛生学教授）
地域保健の立場から…豊島英明（名古屋大学医学部公衆衛生学教授）
成人・老人保健の立場から…岩塚　徹（愛知県総合保健センター名誉所長）
精神保健の立場から…井上　桂（三重大学医学部精神神経科学助教授）
がん予防の立場から…徳留信寛（名古屋市立大学医学部公衆衛生学教授）

一般演題

事務局：〒514　三重県津市江戸橋2丁目174
三重大学医学部公衆衛生学教室気付
日本産業衛生学会東海地方会　平成8年度学会事務局
TEL　0592（31）5012　　FAX　0592（31）5012

第47回　産業疲労研究会及びチェックリスト研修会
1）作業条件チェックリスト研修会
期　日：1996年12月13日㈮
午前9時～午後5時（予定）
場　所：日本車輌製造㈱鳴海工場
本研修会は改善指向型チェックリストを用い、参加型による職場改善の進め方を実際の現場で試みながら研修するものです。産業医、産業看護職、衛生管理者など多くの皆様方のご参加をお願いいたします。
2）定例研修会
期　日：1996年12月14日㈯
午前10時～午後4時（予定）
場　所：名古屋市立大学医学部同窓会館
プログラム：
一般演題
シンポジウム　「交代勤務制の柔軟化をめぐって」（仮題）
事務局：〒467　名古屋市瑞穂区瑞穂町川澄1
名古屋市立大学医学部衛生学教室
第47回産業疲労研究会事務局
TEL　052（853）8171
FAX　052（859）1228

日本産業衛生学会第30回中小企業衛生問題研究会
日　時：平成9年2月1日（土）9:30-17:00
場　所：名大医学部鶴友会館
担当世話人　竹内康浩（名大医衛生）

地方会理事会

平成8年度第1回東海地方会理事会
日　時：平成8年5月7日（火）14:00 ～15:30
場　所：名古屋大学医学部鶴友会館2F大会議室
出席者：44名　委任状：30名
1．報告事項
(1)事務局からの連絡事項（小野）
(2)関連学会・研究会
2．協議事項
(1)各部体制（竹内）
事業部　部長　五藤雅博　副部長　寺沢哲郎、渡辺美寿津
総務部　部長　山田琢之　副部長　後藤円治郎、城　憲秀
学術部　部長　井谷　徹　副部長　（検討中）
編集委員会　委員長　吉田　勉　事務局長　谷脇弘茂
(2)地方会理事追加推薦（竹内）
(3)地方会ニュース第37号（吉田）
(4)平成7年度会計・事業報告案、平成8年度予算案・事業報告案(小野)
(5)東海地方会総会・研修会（橋本）
(6)平成8年度東海地方学会（山内）
平成8年度第2回東海地方会理事会
日　時：平成8年7月2日（火）14:00 ～15:50
場　所：名古屋大学医学部鶴友会館2F大会議室
出席者：43名　委任状：28名
1．報告事項
(1)事務局からの連絡事項（小野）
(2)東海地方会総会・研修会（石川）
(3)本部からの連絡事項（島）
2．協議事項
(1)平成8年度東海地方学会（山内）
(2)地方会関連学会・研究会（小野）
(3)地方会ニュース第38号（吉田）
(4)労働基準局からの資料紹介（宇野）

東海地方会員異動 (H8.4～H8.6)

入会
愛知　山崎　信代（旭硝子愛知）　石原　輝英（藤田保衛大・内科）　和田　昭彦（藤田保衛大医公衛）　長谷川康博（国立名古屋病院）　謝　振麟（名大医学衛生）　牛田　展浩（大同病院）　富士原美保子（社保健康事業財団愛知支部）　村瀬　賢一（中部労災病院）
岐阜　稲葉　静代（岐大医公衛）
静岡　熊沢　年泰（田沢病院）　岡田　和夫（聖隷健診センター）　高田　裕志（富士通沼津）

転入
静岡　中川美佐子(キャノン裾野)…関東地方会より

退会
愛知　馬渕　千之、佐藤　孝一（名市大第2内科）　坂野　哲哉（藤田保衛大）　金子志のぶ（大同病院）　内山　集二（星崎診療所）　水嶋美恵子（社保健康事業財団愛知支部）　中島　博文（JR東海総合病院）　島田　哲夫（江崎医院）　野沢　淳二　橋本　隆光（橋本歯科医院）　早川　直義（本郷歯科医院）　松浦　英治（愛教大）　山崎　慈（大同病院）　山田　博豊
静岡　鈴木　典子（聖隷健康診断センター）
岐阜　安部能婦子（岐阜県産業保健センター）　伊藤　寛次（岐阜県産業保健センター）

転出
愛知　本田　寛（ヤマハ健康管理センター）…九州地方会へ

産業医募集

産業医　1名募集
業務内容　健康診断、人間ドック、職場巡視
賃金等については面談のうえ呈示します。
連絡先　〒453 名古屋市中村区太閤1丁目19-40
JR東海総合病院　保健管理部　牧野宣一
TEL052-451-7013　FAX 052-451-2507

編集後記

オウム教団の幹部には私とほぼ同年齢の人が多くいた。私の80年代の大学生活を振り返ると、彼らがオウムの道に入っていった状況が想像できる。80年代にメディアで取り上げられたテーマとしては、弱者への共感、清貧と正義は影を潜め、真面目さを嘲笑することが支配的であった。全てが相対化されたような感覚の中で、何か信念のある生き方を若者は求めていたと思う。そのような状況下で、教団のドグマ的呼びかけに彼らはすがる思いでついていったのであろう。ところで、戦争中の日本は世界からみればオウム的国家に見えたに違いない。現代の私たちも、知らず知らずのうちに独りよがりな価値観を集団的に持つ危険があることを忘れてはならないと思う。
市原　学

次回発行　平成9年1月1日
編集責任者　吉田　勉（聖隷健診センター）
編集委員（五十音順）
井谷　徹（名市大）　市原　学（名大）
岩井　淳（全日本労働福祉協会）　大久保浩司（東芝四日市）
加藤　保夫（岐阜県産業保健センター）　鎌田　隆（本田技研浜松）
後藤　猛（労働衛生コンサルタント）　五藤　雅博（旭労災病院）
榊原　久孝（名大）　清水　高子（清水ヘルスケア）
高柳　泰世（本郷眼科）　谷脇　弘茂（藤田保衛大）
松本　忠雄（刈谷保健所）　山田　琢之（愛知医大）